

文献に見る大地の変化

川崎逸郎

1. 「駿河国風土記」をみると次のような話がある。

案風土記、古老伝言、昔有神女、自天降来、曝羽衣於松枝……。

御存知の羽衣の物語の冒頭、若い漁師が水浴する天女の素肌に魅せられた。ところは三保の松原、その結果は……

於是 遂興漁人為夫婦 蓋子得已也……。

天女が水浴した三保は、風土記前文には「三保松原在駿河国^{きん}有度郡^{りやうど}有度浜」とあるが、この物語の項は有度浜はあっても三保の地名は未だ出ていない。すると天女が羽衣の松の枝に曝したのは現在の三保松原ではなく、それより、4kmも西にもどった有度山（久能山）の近く、駒越か原、柝戸の松林らしい。そして物語の結果は「其後一旦女取羽衣 乗雲而去 其漁人亦登仙云」となる。

風土記の年代から推定すると、現在の三保の長い砂嘴は千年で6kmも生長したことになる。

2. また「更級日記」には

今は武蔵国になりぬ。ことにおかしき所もみえず、浜も砂子白くなどなく、こひぢのよにて、むらさき生うと聞く野も、芦おぎのみ高く生いて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで、高く生い茂りて……。

これが今から950年くらい前の江戸、今の江東地区一帯、古利根の流水が東京湾に入るところに生長した三角洲にひろがる風景である。「これが武蔵野か」……とがっかりした作者の姿が浮ぶ。一面の湿地帯である。これでは前に進むことはできない。母と娘、主従は北に路をとり松戸のあたりから西に向ったのであろう。

3. 「奥の細道」のなかに

「松島は笑うが如く象潟はうらむが如し……」雨の中を芭蕉は象潟に來た、その胸に去來したのは何であつたか。翌日は晴れ、弟子の曾良と共に象潟の海に舟を浮かべてみれば、昨日見た雨に煙る鳥海山の姿忘れがたく……象潟や雨に西施がねぶの花……。

「寂しさに悲しみをくわえて、地勢魂をなやますに似たり」とある。元禄二年（1689）の七月の末の頃である。この象潟地域は、享和元年（1801）鳥海山が大噴火を起してから小地震が続いており、文化元年（1804）六月四日に大地震が発生し海は陸となってしまった。死者500以上と記

録されている。芭蕉主従が舟を浮べたところは、現在の田んぼから数mの高さになる。

次いでではあるが文化元年は小林一茶が江戸の俳壇で名を成した頃で、この頃の一茶に次の句がある。

古郷の見えなくなりて鳴雲雀

我恋はさらしな山ぞかえる雁

4. 文献にみる「富士山」の噴火

「甲斐国言 駿河国富士火山 忽有暴火……土礫石流埋八代郡本栖并剗兩水海 水熱如湯……」

日本三代実録巻九、清和天皇の貞観6年7月17日のことである。猿橋溶岩流と青木原溶岩流がなこのときのものといわれている。西暦858年のことである。富士山の噴火の記録は800年代（延暦）の初め頃からあるが、貞観の噴火の記録は最も刻明である。現在の報道記事を遙かに上廻る名文。

「その山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲のなかへたち上るとぞ言い伝える」この文から富士山は貞観の噴火より竹取物語（860）の頃まで活動が続いていたらしい。

「彼富士の山にて此の書を焼かれかり、その煙はたして天を指して昇る。それよりこの方富士には煙立ちけり。光孝、宇多の頃より絶えけり……古今和歌集注」光孝、宇多は仁和、寛平の頃（885～889）。そして、「今はふじの山もけぶりたたずなり……（古今和歌集序）延喜五年（905）」……富士の活動はこれで休止期に入った。ところが

「富士の山はこの国也、わが生いいでし国にては西をもて見え（山地、その山のさな、いと世に見えぬさまなり……山の頂のすこし平らぎたるより煙は立ちのぼる。夕ぐれは火の燃え立つも見ゆ）。更級日記の一節、藤原高標の娘が母に手をとられ恐ろしい足柄越えをして山を降り、振向けば……山の頂きに赤い火が燃える富士の姿、夕ぐれの中に鮮かに浮ぶその姿に感動したのであろう。今から950年ほど昔（長保元年の頃か）のこと。すなわち富士山は活動・休止を繰返していた。そして最後の活動は宝永4年（1707）、以来静けさを保っている。

以上は文献のほんの一部、昔の人々の観察の細かさに敬意を表すると共に、日本列島の地形は歴史時代に入ってから変動を続けていることを知って欲しい。

（千葉大学）